
びよリスカウト

朝食リンゴヨーグルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

びよりスカウト

【Nコード】

N1647BA

【作者名】

朝食リンゴヨーグルト

【あらすじ】

風紀委員きつての英雄、雲仙冥利が箱庭学園を去って13年が経った風紀委員のお話です。

そして未来の箱庭学園。

実のところ、

この箱庭学園の治安を任されているただ一つの組織、風紀委員には、『モンスターチャイルド』と呼ばれていた風紀委員きつての化物、雲仙冥利先輩が去つて以来、一人も13組生が入ることはなかった。

雲仙冥利先輩が去つてからというもの。

要するに12年という間、13組から風紀委員に入る生徒は一人としていなかった。

それに、

その結果に、

何か明確な理由や原因があるのかと言われれば、実は納得させ得るほどの理由は、特には無い。

別段、風紀委員が13組生の加入を禁止したわけではないし、13組生が入る枠も無いほど風紀委員の人数が増加したわけでもないし(そもそも風紀委員は生徒の4分の1が加入した時期でもこれ以上の加入を断ることはなかった)、はたまた13組が無くなつてしまった、といったことでもなかった。ならばこの現象は、奇跡というべきだろうか、偶然というべきだろうか。

いや、これこそ、

否、これこそ、

『異常』によって引き起こされた『異常』な結果というべきか。というか、そうなのだろう。

誰に言われるでもなく、

理屈付ける必要もなく、

技術や才能で説明するまでもない、

常に気持ち悪い結果だけを出してしまう『異常』の『異常』による『異常』な現象なのだろう。

、しかし。それが『異常』によって引き起こされた結論付けてしまつと、

「一年13組。日生野 日和です」

この度、つまり13年目を記録しようとしていたその年に、その『異常』を打ち破るかのごとく、ココに入ることになった『ボクたち異常』は一体、何者なのだろうか。

次から面白くなる予定。

物語というのは、どこから始まるか、なにから始まるか、いつの時代から始まるか、そして、だれから始まるか。

「6W1H」ではないが、そういった冒頭における選択はかなり重要というのが僕の持論である。

さらに言うならば、そういった情報はあらかじめ最初の方で全て明かすべきだ、という持論もある。

Qどこから始まった？

A一年1組！

Qなにから始まった？

A友達と将棋！

Qいつの時代から始まった？

A雲仙冥利先輩が去った13年後！

Qだれから始まった？

A僕、日生野 日和からです！

こんな風に。

こんな風に、全てを明かした上で書くべきだ。 そうした方が、
楽だし、分かりやすいし、いいだろう。

全てを隠している状態から徐々に明かしていく、と言った手法も、
それはそれでとても素晴らしいやり方だとは思いますが、残念ながら、
僕はそんな高度な技術を持ち合わせてはないので、だからこそこんな
単純明快な始まりからやるしかないわけだ。

「だからこそ僕は、こういう始め方をする!」
横一列に並んでいる「歩」の中の一つを、前に動かす。
タン、と小さな可愛らしい音が鳴る。

「そんなに意気込まなくても」
その対面から再度、タン、と小さな可愛らしい音が鳴る。

そんなこんなで、13組の生徒と仲良くなれる自信が無かった僕は、1組の中学からの友達、御船^{みふね} 文^{ふみ}と一緒に将棋を始めたのであった。

ルールはさすがに分かるとして、さて将棋の実力の方だが、正直言って弱い。

今だって、自分が後攻になって相手の真似をひたすらしておけばよかった、とかそんなことを考えていた。

一年1組の教室。
そして一年1組。さすが「普通」とグループわけされた生徒たち。普通に出席して普通に友達と話しながら昼飯を食べて、普通に机に座って駄弁り、普通に暮らしている。これぞ、一年1組と言えるだろう。

つくづく思う。なぜ僕がここでは無かったのだろう。やはりおかしい。不思議で不思議でたまらない。アリスでさえこの不思議には首をかしげるだろう。

「文さん、文さん」

「なんでしよう?」

「僕って、なんで13組に選抜された訳?」

「知らね。お前の日頃の行いじゃない?」

「ええー…」

日頃の行いのせいか。確かに、良いか悪いかと言われたら、胸を張って良いと答えられるほどの善良な人間ではないとは思っけれど、かといって悪いわけでもないぞ、僕。

「ま、なったもんは仕方ないですよね」

「そうそう。なんでも割りきれぬやつが、案外地球を回すんだ」

「カツコいいこと言ってるところ悪いけど、文さん」

「なんでしよう？」

「『歩』って何ターン目から『ト金』になるんだっけ？」

「ターン制ッ!？」

前言撤回をしよう。ルールさえ心得ていなかった。

「将棋にターン制でお前、前代未聞だぞ」 文は呆れるように笑った。しまった。呆れさせてしまった。

なんとなくは分かるんだが、何分、昔教わって以来ほとんどやった記憶がない。言い訳だが、人間は長いスパンを空けてしまうと、声帯を振動させるやり方(つまり喋り方)だって忘れてしまうもの。ましてや長年やってないゲームのルールだ。忘れるのも仕方がないだろう。

ザ・言い訳を恥ずかしげもなく語ったところで、僕は文にルールを教えるもらうことにした。のだが、

《風紀委員に連らああく!》

どうやらルールを教えるもらうのは後になりそうな、耳をつんざく、悲鳴にも似た声が聞こえた。どうやら教室の隅に設置してあるスピーカーからだった。

悲鳴は続く。

《風紀委員の新一年は至急、ボクン家に来なさい! 勿論、この学園内のボクン家ね! 一位には熱いKISSを! ビリには冷たいKILLを! 優しい優しいボクがプレゼントしちゃいまーす! だからアブセントは止めてね! じゃ!》

そして悲鳴は止んだ。

「今のって可愛先輩…だよな？」

銀と金の説明をはじめようとしていたのだろう、それらを右手でイジリながら文が言う。

「そういうこと、らしい」

上履きを脱げないよう、深く履き直しながら僕は答える。

「あーあ。ルール説明含め、将棋はまた今度か」

つまらなさそうに将棋のコマを箱に直していく文を後ろ手に、後ろめたさを感じながらも、僕は教室を駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1647ba/>

びよりスカウト

2012年1月5日01時54分発行